

ひたむきな努力の匂い

「頑張った匂いがする」。これは、「私の折々のことばコンテンツ」(主催・朝日新聞)の二〇一八年度受賞作品です。この中学一年生の女子は、小学校低学年の頃、「ただいま。」と帰ってきたら、母親が「おかえり。」と言って「頑張った匂いがする」と言っていて、ぎゅつとしてくれたと、この時に感じたことを解説しています。涙を流した後を察しての、お褒めのことば。最近、親の、子に対する無関心や虐待が伝えられる中、余計に温かく幸せな気分になりました。

今年の一月に大相撲を引退した元横綱・稀勢の里は、それまでは勝負の世界に身を置き、ましては唯一の日本人横綱になってからは、想像以上のものを背負ってきたはずですが、

ご存知のように、稀勢の里は二年前の春場所まで左肩に負傷を負いましたが、大逆転で二場所連続優勝を果たしました。しかしその後の休場や連敗など、横綱として不名誉な成績を残しました。それでも、常にまっすぐ当たって前に出る取り口と同様に、そのまま横綱の品格と重責を全うしたと思います。引退した翌二月に大相撲の解説者としてテレビ出演を務めました。積極的にわかりやすく、現役時代とは全く別人のような冗舌さと屈託のない笑顔に、「頑張った匂い」を感じました。

中一の女子同様、その匂いは苦く塩辛くも、まぶしい輝きを感じます。誰もが成長してゆく過程の中で少なからずこのような体験を経ていると思います。ちよつと懐かしい匂いが出てきました。

株溝口祭典 溝口



「僅(=わずか)」に通じ、「小さい」の意味から、小さい草「すみれ」を意味する「堇」という漢字が成り立ちました。